

ロボットとベッドの重量

直木三十五

青空文庫

「お前、本当に——心から、俺を愛しているかい。」

K K 電気器具製作所、ロボット部主任技師、夏見俊太郎は病に蝕むしばまれ、それと悪闘し、そして、それに疲労してしまつた顔と、声とで、その夫人に、低く話かけた。（また——病人つて、どうしてこんなに、執拗しつこいものなのかしら）

夫人は、頭の隅で、一寸、こう眉を、ひそめてから、

「ええ、愛していますとも。」

夫人の頬は、新鮮な果物のように、艶つやつや々しく、黄金色の生毛うぶげが、微かに光っているし、その腰は、典雅な線で、その豊満さを現しているし、それから、その下肢は、張切つて、滑かだつた。

「俺が、死んだなら——独身ではおれまい。」

夫人は、病気前の、病気中の、狂的な、………を思い出して、肌を、蒼寒くした。脂肪気の無くなつた皮膚のゆるんだ——だが、眼にだけ、異状な光と、熱と

を持った、少し、臭気のある呼吸。それが、獣のように………思い出して、憎悪が、肌中を、毛虫のように、這い廻った。だが、その嫌忌すべき夫の顔を取除いて、そうした事を思出すと、夫人の血管の中には、熱を含んだ愛欲が、滲み出してきた。

「いいえ。」

夫人は、そう答えたが、微妙かに、（同じ死ぬなら、早い方がいい、妾も、すっかり、看護に疲れたわ）と、思ったし、すぐ、その次の瞬間に、

（まだ、若くて、美しいんだから——）

と、思つて、自分の両手を、並べて眺めた。

そして、

「こんなに、荒れたわ。」

と、いった。そして、そういうながら、自分を誘惑した男、戯談のようにいい寄つた夫の同僚の一人、手を握つた会社の課長、酔つて接吻をしようとした親族の男などを、壊けた鏡に写っている記憶のように、きらきらと、閃かせた。

「俺が、死んで——もし、男が欲しくなったなら——」

「嫌、そんな話。」

夫人は、夫のきている毛布の中へ、手を差込んで、夫の指を握った。

「そんな事、考えないで、早く、よくなつてね。」

夫は、疲労した瞳を、部屋の扉ドアの所へやった。

「あの、ロボット。」

夫人は、振向きもしないで、

「早くよくなつて、又、これを、二人の物にしましょうよ。」

「あの三号のロボットを俺だと思つて——」

俊太郎は、夫人の指を握りしめて、愛の印を与えた。

「嫌よ、そんなこと。貴下あなた、頭が、どうかしているわ。さ暫く、お眠やすみなさいね。」

夫人は、手を引いた。

「俺は、そういうように、特種な設計をしておいたんだ。」

「嫌、嫌。」

夫人は、椅子から立上つた。そして、扉の方を見た。扉の傍に、精巧な、軽金属製のロボット——侵入者を防ぐためのロボットが、冷かに立っていた。青い服を着て、手袋をはめて、パリから来た、一九三六年型の、パリ女の好みの顔立をして、じつと、夫人を眺め

ていた。

二

俊太郎は、ベッドの上へ起上った。湿^{うる}おいの、無くなつた眼、眼^{まぶた}瞼の周囲に、薄暗く滲^に出して^{じみだ}いる死の影、尖つた頬骨、太くせり出したこめかみの血管——そんなものが、青磁色の電燈カバーに、気味悪く照し出されていた。

その、ベッドの側に、合成アルミニウムのロボットが人体と——肌と、同じように巧妙に塗料を施されたゴムを密着して、裸体のまま突立っていた。それは、俊太郎が、ロボットを、どれだけ、人間に近づけ得るか、という研究の対象物となっていた物で、ゴムの厚さ、薄さ、その硬軟の度合が巧妙に、アルミニウムの支柱^{おほ}を蓋うていて、その眼は、廻転をするし、その眼瞼は開閉するし、口、それから発音、歩行、物の把握——それらの動作は、殆ど人間とちがわなかつた。

俊太郎は、病氣の前、その前兆として、身体に異状のあつた時、そのゴムの上の、塗料の膜へ、電氣を通じる事を施こして、身体を揉ました事があつた。そして、夫人にもそう

した事をさせた時、夫人は、

「人間、そっくりね。ロボットの手まで、暖いわよ。」

と、俊太郎を、媚の眼で、眺めた。

「恋人にもつたら？」

「素敵だわ。」

夫人は、そういつて、ロボットの無表情な——だが、美しい顔を、ちらつと見た。

「恋愛の対手あいてには、不十分だが、それ以外の対手になら、人間以上だよ。」

「そんな事、出来て？」

「簡単さ、ベアリングを入れて、自由に動くようにすればいいのさ。」

そういつている俊太郎の顔を、夫人は、じつと眺めていたが——その腹部の、特殊装置の、部分を完成する少し前に、彼は、病氣になった。そして、今、それを完成しようとしているのであつた。

冷かに光ったベアリングが、前後に、左右に、円滑な運動のできるよう、適当に噛合つていて、電気の通じてくる銅線、液体の入ったゴム袋。それを上下から圧迫するように装置されたニッケル板——それらの物を、適宜に、操作出来るよう、ロボットの背の下部に、

三箇のボタンがあつた。

俊太郎は、少し口を開いて、時々、肩で、呼吸いきをしながら、狂的な空虚うつろな眼を光らせて、ピンセットで、誘導線を直したり、スイッチを捻ねつて、ベアリングの運動を試めしたり――そして、

「これが、第一の贈物。」

と、呟ささいた。それから、暫く、眼を閉じて、疲労を休めてから、腹部の蓋を閉じて、静かに、ロボットを抱き上げた。足部は、重かつたが、桐のように軽いロボットは、俊太郎のベッドの上へ、横になつた。俊太郎は、水差から水をのんで、ロボットを、うつ伏せにして、枕元のベルを押した。

「はい。」

次の部屋から、看護婦が返事をして、すぐ、扉を開けて出てきた。そして、ロボットを見ると、

「あら。」

それは、動いてはならぬ病人の不謹慎さを叱責する声であつた。俊太郎は、険しい眼をして、

「ここへ、一寸、腰をかけて。」

ベッドを、指した。

「お起きになつては、御身体に、大変さわかりますよ。」

「ここへ、かけてくれ給え。」

そういつて、俊太郎は、ベッドの中へ、入った。看護婦が毛布を着せた。

「かけ給えつたら。」

「かけるだけでございますか。」

女は、ベッドの端で、いつた。俊太郎は、頷いた。そしてロボットを見ていた。看護婦が、ベッドへ腰を降ろすと同時に、ロボットは、投出していた両手で——右手は、ベッドの端を左手で下の毛布を掴んだ。そして、把握力が加わってくるらしく、毛布を掴んだまま、俊太郎の身体ぐるみ、じりじりと、自分の方へ引寄せて、両手で、胸を抱くように——右手は、藁蒲団わらぶとんぐるみ、強烈な力で、引寄せかけた。

「よしつ、立つて。」

俊太郎が、こういつて、看護婦が立つと同時に、ロボットは、操作を止めた。

「あっちへ行つて——」

「ええ、そのロボット——」

看護婦は、俊太郎の、病的な神経を恐れながら、そういうと、

「もう用はない。」

「はい——余り、無理を——」

「判ってる。」

看護婦が去った。俊太郎は、仰向きになったまま、暫くじっとしていたが、いつも、ロボットを置いてある、扉の所から、ベッドまでの距離を、頭の中で計りながら、（ベッドに、重量が加わると同時に、ロボットが、自動運動を始めて、ベッドの方へ来る装置——ベッドの下のバネが——そうだ、バネが、リズミカルに、動く——その、ある度数を経た時に、ロボットが、行動を起す——それがいい。装置は、簡単だ）

俊太郎は、そう考えて、

「第二の贈物だ。」

と、呟いた。

夫人は、和服で、膝を重ねていた。絨氈じゅうたんの上に、長襦袢の裾が、垂れていた。クツシヨンの中へ、埋まって、煙草を喫いながら、

「そりや、愛してるわ。」

男を、そういつて、ちらつと見て、男の眼の微笑を見ると同時に、

「正確にいうと、愛していた、だわ」

「病気になつたり、愛されなくなつたり——二重に不幸ですね。」

「自ら招いた責任よ。夫の資格が、半分無くなっているのに、妾わたしにだけ、同じでいろなんて、不合理よ。」

男は、左手を、椅子の後方へ廻して、夫人の、頸くびを抱いた。夫人は、煙を、男の顔へ、吹っかけて、

「その代り、癒なおれば、元々どおりに、愛してやつてもいいわ。」

「僕は、どう成るんです、その時——」

「判らない。」

「二つの場合がありますね。」

「そうよ。」

夫人は、そういって、重ねている左脚の先で、男の、靴を押した。

「一つはさよなら、一つはこのまま。」

「そうよ。」

「一体、どっちなんです。」

「そんな事、今から考えてどうするの。」

「だって、僕にとっては、重要問題です。」

「さよなら、をすると、いったら、現在の状態が、変化する？」

「いくらか——」

「気持の上で。」

「ええ。」

「じゃあ、変化するがいいわ。さよなら、をするわ。さ、変化して頂戴。」

夫人は、顔を正面にして、男を見た。

「どう変化した？」

「そう、急には。」

「変れない？」

「だって——さよならが、嘘だか、本当だか——」

「本当にするのよ。だから、変って頂戴。」

男は、夫人の頸を、引寄せようとした。夫人は、その手を掴んで、

「変らなけりや、嫌。」

男は、黙って、夫人の左手をとった。夫人は、身体を反らして、

「変れないの？」

「よく考えておきましょう。」

「そう、よく考えておくってこんな恋愛が、そんなに考察に価して？」

夫人は、ほのかに、香料を漂わせながら、近々と、凝視している、情熱的な眼へ、微笑でいった。

「僕には。」

男は、手に力を込めた。

「ロボット以下だわ。」

「以下？——どうして？」

「人間は考えられるだけ下等なのね。ロボットは、する事だけをして、何も考えないわよ。」

「だから、機械じゃありませんか。」

「人間より幸福な。」

「自ら幸福という事を感じえない幸福は、人間には存在しませんよ」

「幸福を十分に感じる人間は、不幸も十分に感じるわね。」

「それが、人生です。」

「一九三〇年代までの。」

「永久の。」

「ロボットを学べ、鈴木金作。したい事をして、悔を感じない人生。」

「じゃあ、僕と、今、さよならしても、奥さんは、感じない？ 何も？」

「あんたの出て行く、一步、後から、次の男を求めに行く。」

「僕は、さよならしない。」

男は、眼に、手に、力を入れた。

「人間の男の取柄は、その情熱の昂進してくる所だけね。」

「ロボットのほうが——」

男は、情熱が、血管の中で、溢れてきたのを感じた。夫人は、男の顔が近づくの、押されるように、クツシヨンの中へ、だんだん凭れ込みながら、

「自分の意志のままになるロボットもいいし、自分の意志以外の方法を教えてくれる男もいいわ。ロボットが、俊太郎が出来て以来、女性の感覚は、二倍によくなったわ。」

夫人は、朗かに笑って、じつと男の眼をみつめた。

四

「このベッドは、御前と、俺とだけのものにしておきたい。」

俊太郎は、凹んだ眼の中から、力のない表情でいった。

「ええ。」

「ここだけは、汚してはいけない。」

「誓うわ。」

「そうかい——じゃ、このロボットを大事にしてくれ。俺だと思って。」

「随分、精巧なのね。」

皮膚の感じ、体温、その素晴らしい機能、その微量の電気による魅惑的な刺激、それは、機械によって、感じる——機械によってのみ感じえられる、女性にとっても驚くべきものであった。

「俺は、機械技師だが——このロボットに対してだけは、生理学的の研究を加えてある。」

「そうらしいわね。」

「それから——同時に、俺は、靈魂の神秘を、信じる事ができる。」

「靈魂？」

「ロボットを愛さなくなれば、彼奴は、御前に復仇する。」

「あのロボットが——」

「ああ。」

「どんな復讐？」

「殺す。」

夫人は、黙って——だが、心の中では、この執拗な愛に、憎悪と、輕蔑とを感じて、
「そう。」

と、一言だけ、軽くいった。

「もう、二、三日しかもつまいが——俺は、俺の精神をこめた、三号ロボ以外に、御前を渡したくないんだ。」

「また始まったのね。よく、判っているわ。」

「俺にも、よく判っているから、幾度もいうんだ。御前は、もう、独身で居れなくなっているから——」

「だから、ロボさんを愛していたらいいじゃないの。」

窓は半分閉じて、カーテンがかかっていたし、ベッドの半分にも、カーテンがかかっていた。壁の織物、クルミ床の上の支那絨氈、大きいスタンド、白大理石の鏡台、そんな物が、悉く、陰鬱に、黙り込んでいた。夫人は、

（誰か、見舞人でも、来ないかしら）

と、ちらつと、考えたり、ロボットの巧妙な、そして、人間とはちがった異様な感覚を、回想したりしていた。

「ロボットの靈魂——あるよ。」

俊太郎は、呟いた。

「嫉妬する？」

「ロボットは、御意ぎよいのままか、然しからずんば、破壊か、だ。」

「そうね。」

夫人は、口だけで答えた。そして、機械人ロボットと、新らしい愛人との比較を、頭の中で、灼けつくように考えていた。

「もう、四時だわ。お薬を上る時間よ。」

夫人は、腕時計をみて、（もう来る時分じぶんだのに——）と思った。

「侵入者を防ぐためのロボットで、自分を壊さぬよう注意してくれ。ね。」

「ええ。」

そう答えた時、看護婦が、ノックして入ってきた。

五

「実に、精巧なものだ。ちつとも、人間とちがわんじやないか。」

告別式に来た人々は、ロボットの手を握ったり、頬を撫でたりして称ほめた。

「称めていいか、けなしていいか——宗教が、人間を救った方が多いか、苦しめ、迷わした方が多いか、判らないように、科学の発達も、功罪不明だね。」

「ロボットのとき、明かに、人間の職を奪ったからね。」

人々は、壁の所の椅子に凭れて、煙を、部屋中に立籠^{たちこ}めながら、話声を、充満させていた。

「全く、科学上の一つの重大発見は、社会の、経済の、根底を動揺させるからね。レーヨンの発達が、生糸を圧迫し、生糸の生産原価の低廉が、綿糸へ影響し、そのレーヨンが、近来、人造羊毛のために、四苦八苦しているなんぞ、よくしたものだ。」

「アメリカでは、携帯用のロボットが、成功したらしいね。」

「あれがね。」

「一尺四方ぐらいで、能率は、このロボットと同じくらいなんだろう。小さい車輪をつけて、合成軽金の支柱を建てると、荷物をつんで、走っても行くし、場所を指定して、距離メーターをかけておくと、一定の角へ行くと、曲りもするらしい。計った距離の所で、右へも、左へも向くんだね。だから、安全で、正確な使をする訳だ。」

「函^{はこ}が、独りで歩いて行くのはいいね。」

「近代風景の一つさ。ロボット専用道路など出来て、人間が踏込むと、跳ね飛ばされたってね。」

「そういう時代になったね。」

「日本でも、電気自動車のタクシーは、大抵、ロボットに成るらしいね。」

「僕は、乗ったよ。五十銭入れると、扉を開けて——不便なのは、知らない所へ行けないだけだが、電気接触器が、出来て以来、絶対衝突の憂はないし——」

「ロボットを政府事業にして、一切の生産は、こいつにやらせるんだね。人間は、だから懐手をしていて、分配だけを受ける。」

「そう成るだろう、それ以外の方法では、失業者がふえるだけだ。」

「所が、君。」一人、が声を低くして、「このロボットは、君、……………もっているんだってね。」

「そうかい。」

「じゃあ、……………一つ作って、売出すか。」

「君のような失恋家には、いいだろう。ロボットなら、反逆を企てないからね。」

「その代り、銀座でも、連れて歩いたら、何奴どいつのも、皆、流行女優はやりの似顔をしていてうん

ざりするだろう。」

「僕は、美人の新型を作るよ。一方の眼が大きくて、一方が細いとか、前にも、後方うしろにも顔があるとか——」

「とにかく、人間の女なんざあ、どの面も同じで、おもしろくねえってな事で、鼻の三つある奴を連れてき。」

「ロボットなら、女房も、妬やくまい。」

「その代り、女房も、男のロボットを愛するから、いよいよ人類破滅期だね。」

「強制命令で、人工受胎をさせるさ。」

「差しずめ、僕のごときは、模範的××保持者だね。官報で、人選の発表があると、女が、群がってくる。」

「もう、よそう。俊太郎め、地下で、くしゃみしているだろう。」

「しかし、急激に変化するね。社会も、人間も——恐るべき、科学の力だ。」

「貴女は、僕よりも、ロボの方を、愛しているように見えますね。」

「犬を愛するように。」

「嫉妬じゃないですが——そんな、馬鹿馬鹿しい感情はないですが、ロボを愛するという事は、結局、僕に、資格がない、という事を語っていますからね。侮辱の一種だと思いますよ。」

「じゃ、妾が、このパイプを愛しても。」

「パイプはちがいますよ。」

「そういえば、そうね。愛する形式と、感情の変った手遊おもちゃが、妾には、一つ増えたわけね。——そういえば——どういったらいいんでしょう。確かに、可愛いいわ。妾の意思がそのままに通じるでしょう。だから、半分は、自分を愛しているようなものね。自分が、両性を具備したような、妙な、感覚と、感情とは、たしかにあるわ。そして——感覚は、刺激的な事ほど、喜ぶでしょう。異状な感覚ほど——妾、あのロボさんの、金属の香が、好きになったの、冷たい、くすぐったい、——」

体臭に近い、獣的な香水の匂が、漂っていた。夫人は、ロボットの胸に描いたのと同じ、草花のデザインを、青と、朱あかと、紫とで、化粧した胸に描いていたし、露出した脚には皮

膚の上へ、鮮かな塗料で、幾筋もの、線が引かれていた。それは、足を長く見せると同時に、魅惑的な、肉体装飾でもあった。

「それから、人間の力って、知れたものだけど、ロボさんのは無限よ。女性って、だんだん、その力を耐えて行く内に、男性なんか、つまんなくなってくるわ。でも、いい所も、人間にはあるわね。」

「じゃ、僕とは——」

「……………」

「二週間という約束でしたから、僕は——」

「憶えているわ。五時って。」

「それに——」

「五時二十分に来たでしょう。ロボさんなら、五時が、一つ、二つ打った時、ノックするわよ。」

「恋愛にさえ、ロボ助が、勝つようになっては、人類の最後ですね。」

「ええ、生殺与奪は、女性の手へ、戻ってきた訳ね。」

「そうらしいです。」

男は、立上った。そして、扉を開けて、次の部屋へ入った。その右側には、新しい、レーヨンの色彩的な、日本的パジャマをきたロボットが、微笑ほほえんでいた。男は、じっと、眺めて、

「ロボ助。」と、いった。

「は——」ロボが、答えた。

「奥さん、ロボ助つても、通じますね。」

夫人は、薄絹の下の、彩色した身体を、歩ませながら、

「ロボ、だけは通じます。」

「君は、夫人を、愛しているか。」

「は。」

男は、ロボの顔を凝視していた。夫人が、

「愛という言葉も判るわ。」

「そういう単語は、返事ができるんですね。」

「簡単な、恋愛用語だけは——」

「蹴飛ばしてやろうか。」

ロボットは、黙っていた。男は、ロボットが、返事もしないで、微笑しているのを見ると、自分が、蹴飛ばされそうな気がした。

「気味が悪いですねえ。魂があるようだ。」

夫人は、ベッドのカーテンを開けた。そして、腰をかけて、

「ここで、話しましょう。」

と、いつて、椅子を、ベッドの横へ置いて、クッションの上へ、^{ひじ}肱を突いた。

七

「ロボめ、じつと、見ていやあがる。」

男は、椅子から、立上った。そして、椅子を、カーテンの外へ出して、カーテンを引いた。

夫人は、大きいクッションの上へ、身体を凭れさせて、片脚を、ベッドの外に、垂れていた。男は、ベッドの縁に、腰をかけて、

「僕は——」

情熱的な眼で、夫人を見た。夫人は、頭を、クッションの中へ埋めて、細く、眼を開いて、

「何あに。」

それは、牝猫のような、媚と、柔かさを含んだ声であった。男が……

「ロボは、接吻ができますか。」

「一種だけなら、簡単な——」

「じゃ、それは、人間の方が、有利なんですね。」

「そうよ。」

男は、夫人に近づいた。そして、ベッドの上へ、深く、腰かけた。そして、夫人の方へ手を廻した。

「いけない。」

夫人が、頭を振った。それは、拒絶の外観をもった、誘惑的な、媚態の一種にすぎなかった。

ロボットは、ベッドからの信号と同時に、真直ぐに、それは、俊太郎の計算通りに、正確に、進んできた。そして、カーテンを、頭と、身体とで押分けて入って行った。

「ロボさん、来ちゃいけない。」

と、夫人が叫んだ。男が、

「馬鹿。」

と、叫んだ。ロボットは、両手を拡げた。

「どうするの。」

と、夫人が叫んだ時、ベッドぐるみ二人を抱くように、大きく手を拡げて、二人が、蒼ま白つさおに——それは、奇怪な、ロボットの行為に、気味悪さを感じて、骨の髄から、恐怖に、身体を冷たくした瞬間——その、軟かい、だが、力強い手で、二人を、抱きしめてしまった。

「いけない、放して。」

夫人は、ロボットの手から、腕を抜こうとした。男は、肩の骨の上から抱えられて、右手で、ベッドの枠を握りながら、全身の力で、抜出そうともがいていた。夫人は、脚で、空を蹴ったり、ロボットを蹴ったり、顔を歪めて、恐怖の眼を剥出して、

「誰か、誰か——来て頂戴。」

と、絶叫した。ロボットは、徐々に、正確に、二人を、締めつけて行った。……………

.....、二人の骨が痛んだ。

「ああツ——痛い。」

夫人が、叫んだ。その刹那、^{せつな}ロボットが、

「ベッドを汚したからだ。」

と、いった。それは、俊太郎に、よく似た声のように、二人には聞えた。そして、それと同時に、二人は、頭の底へ突刺すような、全身の骨の中までしみ透るような、激痛を感じた。二人は、悲鳴を上げた。

「ロボットの靈魂だ。」

と、ロボットが、答えた。二人の脚は、苦痛に、曲っていた。震えて、指は折れるように歪んでいた。顔は、真赤になって、眼球の中に血が滲んできていた。暫くすると、夫人の鼻穴から、血が流れ出して、眼が飛出すように、大きく剥いて、突出てきた。男も、微かに、呻くだけになった。

人々が、馳けつけた時、カーテンが微かに揺れているだけであった。召使は、

「奥さん。」

と、いったが、そのまま、遠慮して、暫く、二人で、眼を見合せていた。ほとほと液体

の滴る音がした。そして、暫くすると、ゴトツと、機械の止まるような音がした。夫人の脚が、化粧し、彩色されたまま、色が変わって、カーテンの下から垂れているのを見て、二人が、カーテンを開けた時、夫人は、眼からも、口からも、血を噴出していた。そして、ロボットは、二人の上にかぶさっていた。

（「新青年」昭和六年三月号）

青空文庫情報

底本：「懐かしい未来——甦る明治・大正・昭和の未来小説」中央公論新社

2001（平成13）年6月10日初版発行

初出：「新青年」博文館

1931（昭和6）年3月号

入力：川山隆

校正：伊藤時也

2006年10月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ロボットとベッドの重量

直木三十五

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>